

論文

院政期に於ける齋王選考の問題

長 塩 智 恵

キーワード

伊勢齋宮 賀茂齋院 齋王制度 齋王卜定 齋王選考

はじめに

齋王とは伊勢神宮もしくは賀茂神社に奉仕する未婚の内親王または女王のことである。伊勢神宮の齋王を齋宮、賀茂神社の齋王を齋院と称していた。齋宮の起源は、『日本書紀』の伊勢神宮の創始伝承に登場する崇神天皇の皇女豊鍬入姫命、あるいは垂仁天皇の皇女倭姫命に求められるが、制度として整備されたのは、天武朝の大来皇女以降と考えられている。この大来皇女から数えて、南北朝初頭に後醍醐天皇の代に於ける齋王選考の問題

醍醐天皇の代の祥子内親王で廃絶するまでのおよそ六六〇年間に六四名余りが齋宮に選出された。『延喜式』巻第五「齋宮式」によると、齋宮は天皇の即位初めに卜定によって未婚の内親王の中から卜定によって選出され、宮中に設けられた初齋院で約一年間、宮城外の浄野に造られた野宮で一年間の潔齋を経て、卜定より三年目の九月、伊勢神宮の神嘗祭に合わせて、天照大神の御杖代として伊勢に発遣されていた。これは齋宮卜定に遅れが生じる一二世紀後半まで遵守されており、平安期を通じて齋宮の卜定は天皇の即位

儀礼^③の一環として機能していた。

一方、齋院は弘仁元（八一〇）年に平城上皇との間に起こった薬子の変に際し、嵯峨天皇が賀茂神社に戦勝祈願のため、齋宮に倣って娘の有智子内親王を賀茂神社に奉仕させたことから始まった制度である。有智子内親王から順徳天皇の代の齋院礼子内親王までおよそ四〇〇年間存続し、三五名余りが選出された。齋院は『延喜式』巻第六、神祇六、「齋院司」によると、齋宮と同様に天皇が即位したのち、未婚の内親王（女王）の中から卜定され、宮城内の便所に初齋院として三年潔斎に務め、三年目の四月上旬に本院に参入している。このように齋院には齋宮のような野宮に相当するものがなく、齋宮よりも潔斎が一段階少なく、伊勢群行のような発遣儀礼も行われていなかった。さらに齋院は齋宮のように必ずしも天皇の代替わりごとに交替しているわけではなかった。三五名のうち一二名が二代以上の天皇の齋院を務めている。『柱史抄』下に、「天皇踐祚後不^レ可^レ改^二齋王^一之由。被告^二申賀茂社^一。若有^二凶事^一親并身病^一退出之時。被^レ申^二其旨^一。」とあり、齋院を改めない由を茂社に奉告を行えば良かったのである。このように齋院は天皇の即位儀礼との関連は崩れていた。これは天皇の即位初めに交替する齋宮との大きな相違点といえよう。齋院のおもな役割は、「阿礼乎止女」として賀茂神社や賀茂祭

に奉仕することである。ただし齋院は三五人中女王が二人のみで、六四人中女王が一六人もいる齋宮と比べ、内親王の率が高かった。また一六人の女王齋宮のうち、二人までが八世紀の間と、一〇世紀後半から一一世紀後半の二つの時期に集中している。その後院政が始まると、女王齋宮は姿を消すことになる。

ところで齋王制に関する研究は、膨大な研究蓄積があるが、研究題材に偏りがみられる。すなわち①伊勢神宮の創始に関連する豊鍬入姫命・倭姫命伝承の研究、②齋王制成立期に関する研究、③奈良末期から平安初期にかけての光仁・桓武天皇の齋王制再編期に関わる研究など、おもに平安前期までの時期に集中しているのである。一方、平安中期以降の研究は論文も少なく、研究進展も十分な状況ではない。特に院政期は天皇制の過渡期に当たる重要な時期にも関わらず、齋王制に関する専論すらなく、研究が進んでいない。院政期の齋王に関わる研究は、白河天皇皇女媍子内親王に始まる准母立后制などで間接的に触れられる程度である。これらの研究は齋宮・齋院経験者が未婚のまま准母立后され、女院となったという事実関係の指摘が中心で、齋王制そのものについて言及しているわけではない。その中で野村育代氏の説は、院政期の齋王制を考察する上で重要な指摘となっている。野村氏は、後三条天皇の即位によつ

て摂関家が独立した天皇家は、家父長である院「治天の君のもとに独自の家産を院の下に集積し、一個の中世権門として自立した存在となった。そして天皇家に伝領される家産を管理相続するのが、郁芳門院に始まる未婚のまま立后した女院で、未婚女院のほとんどが斎宮・斎院の経験者であったことを明らかにした。

この野村氏の説を受け、榎村寛之氏は一〇世紀以降、摂関家を筆頭とする貴族層が国家の守護神である伊勢神宮を軽視し、都の守護神である賀茂神社を重視する傾向を強めたこと。その結果、斎宮には天皇との血縁関係が薄い女王などが多く選出され、斎院には天皇との血縁関係の濃い娘や同母姉妹などが多く選出されていたこと。ところが院政期になると、斎宮は治天の君である院との関係が重視され、院を家父長とする天皇家の家産管理者である、未婚の女院となるための一階梯として機能するようになり、家としての天皇家を守る武器となったことを指摘している^⑫。つまり女王斎宮が頻発した摂関期に、斎宮は形骸化・相対的地位の低下が進み、存亡の危機に立たされていたが、院政期に未婚女院を形成するためのステップアップの手段として復活したのである。

しかし果たして院政期に斎宮は未婚女院を形成するために復活したのであろうか。そもそも摂関期は斎宮制の衰退

期であったのだろうか。女王斎宮が頻発した時期（円融（後一条）には斎院の交替が行われず、選子内親王が五代五十七年間にわたって斎院を務めている。斎宮は斎院と異なり必ず天皇の代替わりで交替しなければならない。候補者不足などが原因で女王が選ばれた可能性も十分に考えられる。藤原道長・頼通は姻戚にあたる嬪子女王の斎宮儀礼に積極的に関与しており、斎宮に強い関心を持っていた。このことから斎宮が冷遇されていたとは言い難い。また嬪子内親王以降、内親王が未婚のまま准母立后された事例は全部で八例存在し、そのうち六例が斎宮・斎院経験者である。この間、卜定された斎宮は二一名、斎院は一二名もいるが、そのほとんどが退下後に何も厚遇を受けていない。このようなわずかな例を取り上げて、斎宮が未婚女院となるための階梯として機能したとは言い難い。

『延喜式』には、斎宮・斎院が皇親女子の中から卜定されることが規定されている。つまりその人選はその時々皇親のあり方に連動されていたといえる。天皇がすべて成人であった九世紀前半を通して、斎宮及び斎院には今上の娘が選出されていた。しかし九歳の幼帝清和天皇が登場すると様相が一変する。これ以後、幼帝が多く出現するようになり、即位時点において娘が誕生していないケースが続出したのである。当然のことながら、斎宮・斎院候補者は

今上の姉妹以下の皇親女子に限定されるようになる。さらに一〇世紀中葉以降には、皇子女の出生率低下に伴い齋宮に女王、一方の齋院は交替を行われないことが増加する。このことは女王が候補者不足の際に齋王制を円滑に維持するために機能していたことを示す事例ともいえる。ところが院政期以降になると、女王が齋王に選出されることがなくなる。院政期は摂関期同様、幼帝の時代である。極めて少例である准母立后制の出現のみでは、人選の変化は説明できない。むしろこのような変化は齋宮の復活ではなく、皇親のあり方に何らかの変化が生じた可能性も考えられる。

そこで本稿ではいまだ実態解明の研究が進捗していない、院政期の齋王制について、おもに齋王の選考を中心に考察したいと思う。院政の出現が齋王制にどのような影響を及ぼしたのか。院政期は先行研究の指摘どおり、齋宮の復活期であるのか。また女王齋王が姿を消すことになった要因は何であるのか。以上のことに留意して、院政期における齋王をめぐる問題について明確にしたいと思う。

一、女王齋王の終焉

1 白河朝の齋王卜定

延久四（一〇七二）年一二月八日、後三条天皇の讓位を受けて白河天皇が即位した。翌年二月一六日には淳子女王が齋宮に卜定された。淳子女王は敦賢親王の王女で、敦賢親王は小一条院敦明親王（三条天皇第一皇子）の子であるので、三条天皇の曾孫にあたる。今までにも数多くの女王が齋宮に選出されたが、すべて二世女王（皇孫）であり、三世女王（皇曾孫）が選ばれた前例はなく、極めて異例の人選であった¹⁵。即位当時の白河天皇は二〇歳と年若く、娘がまだ誕生していなかった。そのため必然的に姉妹以下の皇親女子の中から齋宮・齋院を選ばなければならなかった。白河天皇には同母姉妹の聡子内親王（二四歳）・篤子内親王（一四歳）がいたが、齋宮に選ばれたのは再従姉妹の淳子女王であった。一方、齋院には齋宮卜定から一ヶ月遅れて同母妹篤子内親王を選んでいる。血縁関係だけに注目してみると、齋宮を軽視した人選を行ったように思える。しかし白河天皇の父後三条天皇は齋宮に第二皇女俊子内親王、齋院に第三皇女佳子内親王を選んでいる。その子である白河天皇が齋宮を軽視していたとは考え難い。そこで白河朝における齋王選考の背景を検証したいと思う。

後三条上皇は讓位から約四ヶ月後の延久五（一〇七三）年五月七日、長年患っていた糖尿病の悪化により崩御する。

このことから、後三条天皇が在位僅か四年半で讓位した有力な説の一つに、疾病が挙げられている。つまり後三条上皇の体調に考慮し、万が一の事態に備えて後三条上皇の皇女たちを齋宮候補から除外した可能性が考えられるのである。何故なら『延喜式』巻五、神祇五、「齋宮」齋王相代条に、

凡齋王相代應^レ歸京者。遣^レ使奉^レ幣亦^レ初。若遭^二國哀及親喪^一者。遣^二中臣一人^一告^二其狀^一。不^レ奉^二幣帛^一。

と規定されているとおり、齋宮は父母の喪に遭うと交代しなければならない。また齋宮は天皇の即位ごとに必ず改められていることから、齋宮卜定は天皇の即位儀礼の一環としてみなされていた。齋宮制は天皇制と対応関係にあり、基本的には天皇一代につき一人の齋宮が理想的とされている。また齋宮が伊勢に発遣される際、『江家次第』巻第一二、「神事、「伊勢群行」に「天皇以^レ櫛刺^二加其額^一、勅^二京乃方^レ趣支^二奈^一」^{（註）}とあるとおり、天皇は齋宮の帰京を望まないことを伝え、自身の御代がいつまでも続くことを願っている。そのため卜定直後に凶事で退下することは好ましくない。当然その人選は慎重にならざるを得ない。短期間での交替の危険性を回避するために、齋宮には白河天皇の

オバもしくは従姉妹以下の血縁者が求められたのである。

一方、齋院の人選は難航したようである。白河天皇の治世初めに行われた齋院卜定は、天皇の即位儀礼とは関係のないものであった。白河天皇の即位以前の延久四年七月六日に齋院佳子内親王が疾病によって退下したため、後任齋院を選んだに過ぎない。『栄花物語』（巻三八、松の下枝）には、この時の齋院交替のエピソードが記されている。

今の齋院も、わづらはせ給て、下りさせ給ぬれば、女院におはしましつる四宮居させ給ぬ。高倉殿の宮、齋院にあさせ給ふべしなどいふ事ありて、今さらにとや思しけん、尼にならせ給ふとて、十二月の八日、戒受けさせ給ふとのゝしれど

今の齋院（Ⅱ後三条天皇第三皇女佳子内親王）が病により退下した後、高倉の宮（Ⅱ後朱雀天皇第三皇女祐子内親王）が齋院候補にはぼ内定していたようである。ところが祐子内親王は「今さらに」と齋院卜定を固辞して出家してしまったため、否応なしに四宮（Ⅱ後三条天皇第四皇女篤子内親王）が齋院に選ばれたのである。前齋院の退下から実に八ヶ月後のことである。死を絡まない退下で後任齋院の決定がこれほど遅くなる事例はあまりみられない。また齋宮・齋院の卜定を同時期に実施する場合、同日卜定もし

院政期における堀江親家の臣屬（畠山）

表 1 平安期以降に於ける高宮・斎院の卜定と退下の時期

天皇	高宮	卜定	年齢	退下	退下理由	斎院	卜定	年齢	退下	退下理由			
桓武	朝原	延暦元 (782)・8・1	4	延暦 15 (796)・2・15 以前	不明	桓武の太子	弘仁元 (810)・9	4	天長8 (831)	老病			
布勢	延暦16 (797)・4・18		大同元(806)・3・7	父前御卿									
平城	大同元 (806)・11・13		大同4 (809)・4・1	父前御立									
嵯峨	仁子	大同4 (809)・8・11		父前御立									
淳和	氏子	弘仁14 (823)・6・3	天長4 (827)・2・26	疾病									
宣子	天長5 (828)・2・12	天長10 (833)・2・28	当帝御立	繼子	天長8 (831)・12・8						天長10 (833)・2・28	当帝御立	
仁明	久子	天長10 (833)・3・26	嘉祥3 (850)・3・21	父前御卿	高子						天長10 (833)・3・26	嘉祥3 (850)・3・21	当帝御立
文徳	晏子	嘉祥3 (850)・7・9	天安2 (858)・8・27	父前御卿	慧子						嘉祥3 (850)・7・9	天安元 (857)・2・28	母の遺棄?
清和	恬子	貞觀元 (859)・10・5	12?	当帝御立	述子						天安元 (857)・2・28	天安2 (858)・8・27	父前御卿
陽成	識子	元慶元 (877)・2・17	4	父上皇御卿	敬子						元慶元 (877)・2・17	元慶4 (893)・12・4	父上皇御卿
光孝	繁子	元慶8 (884)・3・22		父前御卿	繼子	元慶6 (882)・4・9	仁和3 (887)・8・26	父前御卿					
宇多	元子	寛平元 (889)・2・16		当帝御立	直子	寛平元 (882)・10・8	寛平4 (892)・12・1	死去					
醍醐	柔子	寛平9 (897)・8・13	7?	延長8 (930)・9・22	当帝御立	君子	寛平5 (899)・3・14	4?	延長2 (902)・8・4	死去			
						恭子	延長3 (903)・2・19	2	延長15 (915)・5・4	母死去			
						宣子	延長15 (915)・7・19	14	延長20 (920)・6・8	疾病			
						韶子	延長21 (921)・2・25	4	延長8 (930)・9・29	父上皇御卿			
朱雀	稚子	承平元 (931)・12・25	22	承平6 (936)・3・7	母死去	姁子	承平元 (931)・12・25	28	康保4 (947)・5・25	当帝御卿			
											齊子	承平6 (936)・5・11	死去
											繼子	承平6 (936)・9・12	8
村上	悦子	天曆元 (947) 2・26	5	天曆8 (954)・9・14	父王死去								
											葉子	天慶9 (946)・5・27	26
	葉子	天曆9 (955)・7・17	4	康保4 (947)・5・25	父前御卿								

冷泉	輔子	安和元 (988)・7・1	16	安和2 (989)・11・4	当帝蒞位	尊子	安和元 (988)・7・1	3	天延3 (976)・4・3	母死去
円融	隆子	安和2 (989)・11・16		天延2 (974)・閏10・17	死去					
	規子	天延3 (975)・2・27	27	永承2 (984)・8・27	当帝蒞位					
花山	濟子	永承2 (984)・11・4		寛和2 (986)・6・22	普通					
一条	恭子	寛和2 (986)・8・8	3	寛弘7 (1000)・11・7	父親王死去	遵子	天延3 (976)・6・25	12	長元4 (1031)・9・22	疾病
三条	当子	長和元 (1012)・12・4	12	長和5 (1016)・1・29	父帝蒞位					
後一条	嬬子	長和5 (1016)・2・19	12	長元9 (1038)・4・17	当帝蒞位					
後朱雀	良子	長元9 (1036)・11・28	8	寛德2 (1045)・1・16	父帝蒞位	馨子	長元4 (1031)・12・16	3	長元9 (1036)・4・17	父帝崩御
後冷泉	嘉子	永承元 (1046)・3・10		永承6 (1051)・1・8	父親王死去	娟子	長元9 (1036)・11・28	5	寛德2 (1045)・1・18	父上皇崩御
	敬子	永承6 (1051)・10・7		治暦4 (1068)・4・19	当帝崩御	祿子	永承元 (1046)・3・24	8	康平元 (1058)・4・3	疾病
後三条	俊子	延久元 (1069)・2・9	14	延久4 (1072)・12・8	父帝蒞位	正子	康平元 (1058)・6・27	14	延久元 (1069)・7・24	疾病
						佳子	延久元 (1069)・10・28	13	延久4 (1072)・7・6	疾病
白河	淳子	延久5 (1073)・2・16		承保元 (1077)・8・17	父親王死去	篤子	延久5 (1073)・3・11	11	延久5 (1073)・5・7	父上皇崩御
	姫子	承暦2 (1078)・8・2	3	応徳元 (1084)・9・22	母死去	齊子	承保元 (1074)・12・8		寛徳3 (1089)・4・12	母死去
堀河	善子	寛治元 (1087)・2・11	11	嘉承2 (1107)・7・19	当帝崩御	令子	寛治3 (1069)・6・28	12	康和元 (1094)・6・20	疾病
						祿子	康和元 (1089)・10・20	19	嘉承2 (1107)・7・19	疾病
鳥羽	娟子	天仁元 (1108)・10・28	15	保安4 (1123)・1・28	当帝蒞位	官子	天仁元 (1108)・11・8	19	保安4 (1123)・1・28	当帝蒞位
崇徳	守子	保安4 (1123)・6・9	13	永治元 (1141)・12・7	当帝蒞位	悰子	保安4 (1123)・8・28	25	大治元 (1126)・7・25	母死去
						統子	大治2 (1127)・4・6	2	長承元 (1132)・6・29	疾病
						禰子	長承元 (1132)・11・25	11	長承2 (1233)・9・2	疾病
近衛	妍子	康治元 (1142)・2・28		久安6 (1130)・5・10	疾病	怡子	長承2 (1133)・12・21		平治元 (1139)・閏5・19	疾病
	喜子	仁平元 (1151)・3・2		久壽2 (1155)・7・23	当帝蒞位					
後白河	苑子	保元元 (1156)・4・19	10	保元3 (1158)・8・11	父帝蒞位					

院政期に於ける帝王選挙の問題（長埜）

二条	好子	保元3 (1158)・12・25	11	永万元 (1163)・6・25	当帝即位										
六条	休子	仁安元 (1166)・12・8	10	仁安3 (1168)・2・19	当帝即位	式子	平治元 (1159)・10・25	11	嘉应元 (1169)・7・26	疾病					
高倉	悖子	仁安3 (1168)・8・27	11	承安2 (1172)・5・3	死去										
						權子	嘉应元 (1169)・10・20	11	承安元 (1171)・2・22	疾病					
						嫡子	承安元 (1171)・6・28	27	承安元 (1171)・8・14	疾病					
	功子	治承元 (1177) 10・28	2	治承3 (1179)・1・11	母死去	範子	治承2 (1178)・6・27	2	養和元 (1181)・1・14	父上皇崩御					
安德	不在														
龜岡	深子	文治元 (1185)・11・15	7	建久9 (1198)・1・11	当帝即位	不在									
土御	肅子	正治元 (1190)・12・24	4	承元4 (1210)・11・25	当帝即位	礼子	元久元 (1204)・6・23	5	建暦2 (1212)・9・5	疾病					
順徳	照子	建保3 (1215)・3・14	11	承久3 (1221)・4・20	当帝即位	<div></div>									
忠茂	不在														
徳朝	利子	嘉祿2 (1226)・11・26	30	貞永元 (1232)・10・4	当帝即位										
四条	昱子	嘉承3 (1237)・11・24	7	仁治3 (1242)・1・9	当帝崩御										
徳興	曠子	寛元2 (1244)・12・16	21	寛元4 (1246)・1・29	当帝即位										
徳良	不在														
龜山	愍子	弘長2 (1382)・12・4	14	文永9 (1272)・2・17	父上皇崩御										
寛弘	不在														
伏見	不在														
徳仁	不在														
二条	鮮子	徳治元 (1306)・12・22	20	延慶元 (1308)・8・25	当帝崩御										
花園	不在														
徳朝	權子	元徳2 (1330)・12・19	16	元徳3 (1331) 冬	父帝即位										
光厳	不在														
徳朝	祥子	正慶2 (1333)・12・28		不明	兵乱										

*印=先帝が譲位後すぐに死去したケース。女王=ゴシック体 ※印=ト定時は女王、後日内親王宣下。

くは齋宮卜定を先行するのが一般的である。そして父清和上皇の崩御に伴い齋宮・齋院を交替した陽成朝、阿衡の紛議の影響で政權運営が不安定化した宇多朝は例外として、摂関期までにおいて齋宮と齋院の卜定期間が一ヶ月近くも空くことは違例であった。おそらく篤子内親王は齋院に決まりかけていた祐子内親王が出家をして拒み、他に適当な内親王が存在しないため紆余曲折を経て選出されたのである。

また女王の選定が多く見られた齋宮と異なり、齋院は内親王が卜定されることが慣例化していたようである。『源氏物語』（賢木の巻）には、朝顔の姫君が齋院に選ばれた時のことを次のように説明している

齋院は、御服にて下りゐたまひにしかば、朝顔の姫君替はりにゐたまひにき。賀茂のいつきには、孫王のゐたまふ例、多くもあらざりけれど、さるべき女御子やおはせざりけん。

齋院は女三宮が桐壺院の喪によって退下し、朝顔の姫君に交替した。賀茂齋院には孫王がなるのは珍しい例であるが、他に適当な内親王がいなかったとある。『源氏物語』の記述から、少なくとも紫式部が生きた一〇世紀後半から一一世紀初頭の貴族たちは、齋院には内親王を選ぶべきという認識があったことが窺がえる。当初はリスク

を避け、病の状況が芳しくない後三条天皇の皇女以外から齋院を立てようとした。しかし最有力候補に目されていた祐子内親王が辞退し、他に相応しい内親王がいなかったため、否応なく篤子内親王が選ばれたのであろう。齋院は齋宮と異なり天皇との対応関係が早くから崩れていたもので、齋宮ほど神経質な選考を行う必要がなかった可能性もある。いずれにしろ齋院も当初は後三条上皇の皇女を選ぶつもりはなかった。齋宮より一ヶ月遅れの卜定は、齋院の候補者の選考が難航したためといえよう。結局、篤子内親王は父上皇の崩御に伴い同年五月七日、在任期間僅か二ヶ月程で退下することになる。歴代最短の退下であった。その後、承保元（一〇七四）年一二月八日、故敦明親王の娘斉子女王が後任齋院に選出された。敦明親王の王子女は三条天皇の養子として親王宣旨を受けていた。ところが斉子女王は母の出自が低く正式な妃でもないため、他の兄弟姉妹のように親王宣旨を受けられなかった。白河天皇の同母姉聡子内親王はすでに出家し、白河天皇の皇女もまだ誕生していない。つまり承保元年の卜定においては、齋院になり得る内親王が一人も存在しない状態だったのである。

ところで何故、血統的には三条天皇の曾孫に過ぎない淳子女王が齋宮に選ばれたのであろうか。齋王候補者の選考は公卿会議を経て卜定前に内定していた。²⁰ 前述のとおり白

河天皇はオバカ従姉妹以下の血縁者から斎宮を選ぶことが求められていた。しかし白河天皇には即位当時に斎宮になれるオバや従姉妹が存在せず、必然的に遠縁の皇族女子から選ぶ必要があった。そこで再従姉妹の淳子女王が候補に挙がったのであろう。淳子女王の父敦賢親王は敦明親王（小一条院）の王子であるので、本来は二世王であったが、他の兄弟姉妹と同様に祖父三条天皇の猶子となり、親王宣旨を受けたので、「親王」として扱われていた。これは父である敦明親王に小一条院太政天皇の尊号が贈られ、上皇に准じた扱いを受けていたことに所以する。皇太子であった敦明親王は、外孫敦良親王（後朱雀天皇）の即位を望む藤原道長の圧力によって、皇太子辞退を余儀なくされた。そのことに對する道長の配慮によって敦明親王に異例の太政天皇の尊号が贈られたのである。そのため敦明親王も「親王」として厚遇されたのであった。そして敦賢親王は従兄弟の後三条天皇とその子の白河天皇の即位式で左侍従を務め、王女の居子女王も堀河天皇の即位式で左褰帳の役を務めるなど、実際に朝廷内で重視されていたらしい。さらに敦賢親王は後三条天皇の女御で皇太弟実仁親王の生母源基子の叔父でもあった。他に相應しい皇親女子がいないことに加え、朝廷内における敦賢親王の立場が考慮され、淳子女王が斎宮に選出されたと考えられる。

2 法親王の登場

承保四（一〇七七）年八月一七日、敦賢親王の薨去に伴い淳子女王が斎宮を退下した。淳子女王を最後に、女王斎宮は姿を消すことになる。承暦二（一〇七八）年八月二日、白河天皇第一皇女媞子内親王の斎宮卜定以降、斎宮・斎院には内親王、特に治天の君の娘の選出が多くみられるのである。この人選変化の要因の一つに、白河天皇の治世下で皇親の構成員に変化が生じたことが挙げられる。

『帝王編年記』によると、白河天皇の皇子と伝えられている男子は八人いる。第一皇子敦文親王は中宮藤原賢子所生の御子で、白河天皇の嫡子として期待されており、父帝からも大変可愛がられていた。ところが承保四（一〇七七）年九月六日、当時大流行していた痘瘡により敦文親王は僅か四歳で夭折してしまふ。

第二皇子覚行法親王は典侍藤原経子所生の御子である。承暦三（一〇七九）年七月九日に中宮賢子が第三皇子善仁親王（堀河天皇）を生むと、覚行法親王は永保三（一〇八三）年一〇月二八日に九歳で仁和寺御室性信入道親王のもとに入室させられている。白河天皇が覚行法親王を幼くして出家させ理由として、真言密教法脈と性信入道新王が築いてきた宗教的権威の両方を覚行法親王に相承させようとしたこと。皇位継承者を善仁親王に限定しようとしたことが指

摘²⁶されている。この覚行法親王は父帝から深く鍾愛されており、事あるごとに褒賞を与えられ、承徳三（一一〇九九）年一月三日には出家した皇子としては初の親王宣旨が下された。なお出家後の皇子への親王宣下は前例のないことであり、関白藤原師通の反対を退けて、院の専制的な意見にもとづき行われた²⁷。

その後、応徳二（一一〇八五）年一月八日に皇太弟実仁親王が痘瘡に罹病して一五歳で夭折すると、白河天皇は翌年一月二六日に善仁親王を立太子して即日讓位を行った。後三条上皇は傍流とはいえ藤原北家の血を引く第一皇子の白河天皇より、女御源基子との間に生まれた藤原氏との外戚關係を持たない皇子に皇位繼承候補として期待をかけていた。そのため実仁親王即位の後には、輔仁親王を皇太弟とするように遺詔したとされる。いわば堀河天皇の即位は父の遺言を無視したものであった。寛治五（一一〇九二）年二月二九日、中宮賢子同母妹源師子が第四皇子覚法法親王を生む。覚法法親王は堀河天皇に皇子がなかなか誕生しないため、一四歳まで出家せずにいた。ところが康和五（一一一〇三）年正月一六日に宗仁親王（鳥羽天皇）が誕生し、同年八月五日に皇太子に立てられると、同月二四日になって覚法法親王は出家させられた。その後に生まれた四人の皇子たちも、次々と出家させられている。このように白河

天皇の皇子のうち、中宮賢子所生の皇子以外の六人全員が元服前に出家させられたのである。

白河法皇は堀河天皇の皇子についても、第一皇子宗仁親王（鳥羽天皇）のみ残して、他の二人の異母弟²⁸はいずれも幼児のうちに出家させている。このように白河法皇は皇位繼承を一人に限定するという独特な政策を取ったのである。このことは白河法皇がもともと傍系の存在に過ぎず、直系として実仁親王が皇太子の地位に就き、その死後は同母弟輔仁親王が有力な後継者候補として存在していたため、独力で白河自身の直系としての權威をつくる必要があったためとされている。さらに白河法皇は自己の王權を正当化するため、顕密仏教界の頂点に自身の親王宣下を受けた皇子を位置づけ、法親王を介して仏教界全体を統制しようとしたと考えられている²⁹。白河院政期以降、皇位繼承者以外の未婚の皇子の出家は慣例化してゆく。そのため親王に娘が誕生しなくなり、齋宮・齋院に卜定されるのは上皇や天皇の皇女に限定されるようになっていったのである。

3 女王齋王の条件

それでは親王の娘が誕生しなくなると、何故女王齋王が姿を消すことになったのであろうか。『養老令』継嗣令皇

院政期に於ける齋王選考の問題（長塩）

兄弟子条によれば、「凡皇兄弟皇子。皆以親王。女帝子亦同。以外並為「諸王」。自「親王」五世。雖得「王名」。不

在「皇親之限」。とある。四世王までが皇親であり、五世王は王名を称しても皇親とは認めないことが規定されていた。その後、徐々に皇親の範圍が拡大されていったが、結局、延暦一七（七九八）年閏五月二三日の勅により、四世王までを皇親とする繼嗣令の規定に戻されている。齋宮は『延喜式』卷第五、神祇五、「齋宮式」定齋王条に、

凡天皇即位者。定伊勢大神宮齋王。仍簡内親王未嫁者一ト之。若無内親王者。依世次。簡定女王一ト之。

とある。また齋院も同じく『延喜式』卷第六、神祇六、「齋院司」定齋王条に、

凡天皇即位。定賀茂大神宮齋王。仍簡内親王未嫁者一ト之。若無内親王者。依世次。簡諸女王一ト之。

と、共に未婚の内親王（適任者不在の場合は女王）の中から卜定されることが定められている。齋宮・齋院候補になる得る内親王が不在の場合、皇親範圍内の女王から選出するのだが、その女王にも条件があったようである。嘉応三（一一七一）年八月一七日、頒子内親王が疾病のため急遽齋院を退くことになり、後任齋院のことが問題となった。『玉葉』同年九月一〇日条に、齋院不在問題の合議の詳細が残されている。少し長い引用となるので、幾つかに区切っ

て検証していきたいと思う。

藏人右衛門權佐光雅爲「法皇御使」來。則余着冠直衣一相逢。光雅仰云。齋院兩度卜定已不叶神慮。尤有其恐一事也。而當時其人不御座。何樣可被行哉。可令計申者。余申云、已是朝家大事也。以短慮。輒不能定申之上。如仰詞者。子細不分明。於其人御座之條者。何樣可令申哉、奉沙汰之趣之後、可計申一事歟。

藏人藤原光雅が後白河法皇の使者として右大臣九条兼実の所に参り、後任齋院についての相談が行われた。光雅は「二度の齋院卜定は神慮に叶わない結果となつてしまつた。そして後任の齋院となる人もいない。どうするべきであらうか。」という後白河法皇の言葉を兼実に伝えている。そこで「兼実は齋院の候補が存在しないというのはどのようなことなのか。沙汰の趣を受けた後に考えを申すべきではないか。」と返答している。

光雅云。此事被仰下之時。人々定被申此旨。歟。聊在子細。可答申之由。再三雖申事由。只先可申此趣之由有御定。仍所參啓也。但内々舊齋院可卜定哉否之由。被問先例。仍其勘例各可令見申歟之由雖令申、又以不可然由有仰。仍力不及候。余云。一切至于其人不可御者、

爭默止哉。然者以舊齋院被_レ卜定_一之條。雖可_レ然事。無_二先例_一之上。其運已盡了人也。今及沙汰_一之條。非_レ無_二神慮_一之恐_一歟。答之詞也。專非_レ可_レ被_二奏聞_一。尚有_二恐事_一歟。光雅申云。可_レ存_二此旨_一。密事此事仰詞之次第。頗以不審也云々。

すると光雅は「齋院候補者が存在しないことは動かない。その報告をするために兼実の所に参上した。ただし内々に旧齋院をもう一度卜定するのはどうであろうか。そのような先例はあるのか。旧齋院の卜定は先例がなく、しかも旧齋院は既に齋院の運が尽きた人であるので神慮に叶わない。」と述べている。そして光雅はこのような案を平気で提案する後白河法皇の対応に、不信感を募らせているのである。

余内心案_レ之。院御子被_レ加_二元服_一之宮御坐。其御子息女宮兩人被_レ坐云々。何其人々不_レ被_二卜定_一哉。或人云。非_二親王_一之人子息。無_下爲_二齋宮齋院_一之例_上。若父宮被_レ下_二親王之宣旨_一者。其又不_レ可_レ然云々。此條尤神慮難_レ測事也。乍置_二可_レ然之人_一。被_レ行_下無_二先例_一事_上之條。非_レ愚意之所_レ及。人々皆雖_レ存_二此旨_一。一切無_二其人_一之由被_二仰下_一之上。不_レ能_二申出_一歟。末代之政。只在_二小人之心_一歟。可_レ哀々々。又孫王卜定有_二先例_一也。

兼実は後白河法皇の御子で元服した宮には姫宮が二人いる。何故その姫宮たちを齋院に選出しないのか、疑問に感じていたのである。しかし非親王の子が齋宮・齋院に選出された前例はなく、また父宮に親王宣旨を下し、その子を齋院に選出したとしても神慮に叶うか分からない。結局、兼実の意見は採用されず、高倉天皇に皇女が誕生するまで齋院不在の状態が数年間続くことになる。

この後白河法皇の御子とは、第三皇子以仁王のことである。以仁王は幼い時に最雲法親王（堀河天皇第三皇子）に弟子入りするが、最雲法親王が死去したために還俗し暲子内親王（八条院）の猶子となっていた。院政期に親王宣下を受けるのは、原則として皇位継承の可能性がある正妃（女御・中宮・皇后）所生の皇子、または仏門に入つた皇子（法親王）のみであった。以仁王の母藤原成子は女御になれず、幼少の頃には仏門にあつたものの一二歳のとき還俗した以仁王には親王宣下を行う根拠がなかった。つまり以仁王の二人の姫宮たちは父が親王宣旨を受けていないため、後白河法皇の孫であつても齋院になれなかったのである。この以仁王の姫宮の事例から、齋宮・齋院に選ばれる女王は、親王を父に持つ二世女王に限られていたことが確認できる。例え血統的には上皇の孫であろうと、非親王の娘は齋王にはなれなかったのである。

二、齋王の選出傾向

1 鳥羽朝の齋王選考問題

白河天皇の皇位継承計画の影響により、齋宮・齋院候補は上皇及び天皇の娘にほぼ限定されるようになる。承暦二（一〇七二）年八月二日、白河朝二人目の齋宮として白河天皇の第一皇女媞子内親王が卜定された。媞子内親王は中宮藤原賢子を母に持ち、父帝から大変鍾愛された皇女であった。卜定以前の同年三月一六日には僅か三歳で准三宮の宣旨を受け、年官年爵と封千戸を賜るなど大変厚遇されていたのである。従来、齋宮には天皇の寵が薄い女王や内親王が選ばれたと指摘されている。しかし平安期以降、齋宮卜定時に娘が誕生している天皇は一部の例外を除き、ほとんどが自分の皇女を齋宮に選んでいる。その中には皇后・中宮・女御などの正妃所生の皇女も多く、村上朝の楽子内親王、三条朝の当子内親王、後朱雀朝の良子内親王など、父帝からの鍾愛が深い皇女たちも齋宮に選ばれている。決して意図的に天皇の寵の薄い女王や内親王を選出していたわけではない。このように媞子内親王の齋宮選出は、前例を踏まえて行われたものと考えられる。その後、堀河天皇の齋宮には第二皇女善子内親王（母Ⅱ女御藤原道子）、齋院には第三皇女令子内親王・第四皇女禰子内親王（母Ⅱ中

宮藤原賢子）が選ばれている。これらはいずれも正妃所生の皇女たちで、全員に准三宮の宣旨が下されるなど厚遇されていた。ところが次代の鳥羽朝では、前例のない齋宮・齋院が出現することになる。

鳥羽天皇は父堀河天皇の急逝を受けて即位した五歳の幼帝である。天仁元（一一〇八）年七月二五日に故堀河天皇の諒闇が明けると、早速齋宮卜定の問題が表面化したようである。『中右記』同年七月二七日条には、次のような記事がみえる。

在家之間甲斐權守知信爲^二殿下御使^一來云。來月十三日依^二吉日^一欲^レ上^二最前表^一之處。件日齋宮卜定之議日也。而同日如何可^二量申^一者。予申云。齋宮卜定朝家一代大事也。御上表猶可^下令^レ用^二他日^一給^レ敷。就^レ中齋王未^レ知^二誰人^一之間。頗議之間及^二大事^一敷。他事不^レ可^レ候之由可^レ申者。

甲斐守知信が摂政藤原忠実の使者として權中納言藤原宗忠の許に参り、「來月一三日は吉日なので御上表を行いたいが、件の日は齋宮卜定の議定の日でもある。同日に行ってもよいものか。」と宗忠に意見を求めた。そこで宗忠は「齋宮卜定は国家の一大事である。御上表は他日を用いたほうが良い。特に誰を齋宮とすべきか未だに決まっていない。齋宮卜定の議定は非常に大事であるので、他の事と一

緒に行うべきではない。」と回答している。『中右記』から、通常であれば齋宮選考の会議以前に、齋宮となるべき人の目星が付けられていたことが確認できる。しかし鳥羽朝では齋王候補すら見つからない状況であった。結局、御上表は八月一三日に行われ、齋宮卜定の議定は行われなかった。おそらく適当な候補者が見つからず延期になったのであろう。その後、既存の皇親女子の中には齋宮や齋院になるべき人がいないため、白河法皇の落胤から候補者を決めることになった。『中右記』同年一〇月二六日条には、

齋宮齋院全無其人。仍于今不立_レ申。但無_レ止神事。又不_レ可_二默而止_一。稱_二院并堀川院皇女_一之輩頗有_二其數_一。然而其母皆不_レ落。不_レ知_二一定_一。雖_レ申_二上皇_一不_二慥覺御_一之由。被_レ仰也。去九日爲_二王胤_一哉否之條。内々被_レ問_二六壬占_一也。是依_二江帥申說_一所_レ被_レ行也。而件人四人之中。道言家榮所_二占_一申_一。又以不同也。爲_二天下大事_一如何。民部卿。并下官。頭爲房。密々付_二占形_一量申。季實朝臣孫。稱_二院御女_一之人。皆以合_レ占。先被_レ立_二齋宮_一。何事之有哉。已明後日可_レ被_二卜定_一。追又可_二一定_一者。

とあり、その時の経緯が詳しく記されている。この時、白河法皇や堀河天皇の皇女を自称する者は多いが、皆母親がはっきりせず、父親である白河法皇の記憶も曖昧であっ

たために、真相が分からない。大江匡房の意見により陰陽寮の道言・家榮らが落胤の真偽を占うが、結果が一致しない。そこで今度は民部卿源俊明・藤原宗忠・藏人頭藤原為房が密々に占いを行うことになった。すると木工頭藤原季実⁽³⁾の外孫が白河法皇の落胤だという結果が一致したので、これを白河法皇の皇女と認知し、齋宮に立てることが決定された。二日後の同月二八日に齋宮卜定が行われたが、『中右記』同日条には当日の詳細が記されている。

今日齋宮卜定也。〔中略〕姁子女王是太上皇御女也。而可_レ被_レ爲_二齋王_一也。其前可_レ爲_二内親王_一哉。先問_二外記_一之處。申云。今上男女王子之外。内親王宣旨強_レ不見者。人々可_二一定_一申_一者。藤宰相申云。重猶尋_二先例_一。可_レ有_二一定_一敷。左大辨申云。先例不分明者可_レ隨_二敕定_一。治部卿同_レ之。下官申云。先例已不_二慥見_一。但被_レ下_二内親王宣旨_一。何事之有哉。今思太上天皇威儀。已同_二人主_一。就_レ中我上皇已專政主也。仍存在旨所_レ申也。右大將。民部卿同_レ予。内々被_レ問_二江帥御房_一之時。申旨如此云々。以上_二此旨_一奏聞。頭爲房歸來。仰云。以_二姁子女王_一可_レ爲_二内親王_一者。

齋宮卜定に先駆けてまず姁子女王に内親王宣旨が下されることになったが、今上の皇子女のほかに親王宣旨を下された例は見ない。しかし太上天皇の威儀は今上と同じであり、

院政期に於ける齋王選考の問題（長塩）

白河法皇は「專政主」であるので、嫡子女王に内親王宣旨が下されることが決定された。こうしてまず鳥羽天皇の齋宮が白河法皇の落胤から選考され、その後に齋院卜定が行われた。『中右記』同年十一月八日条によると、

今日齋院卜定也。〔中略〕頭爲房仰下云。官子女王。

准一日齋宮例。先可爲内親王。哉否事。人々可量申。件女王上皇御女、故頼朝朝臣外孫也。年来世不レ知之人也。民部卿以下一同申云。齋

宮卜定之時。一日已定申了。准彼例。被爲内親王。可宜歟。是只同事者也。

故源頼綱の外孫官子女王が齋院に内定していたことが窺がえる。官子女王は長年の間誰にも知られておらず、齋宮・嫡子女王を先例として齋院卜定の前に内親王宣旨が下されることになった。このように齋院も白河法皇の落胤の中から選ばれたのである。

しかしここで留意したいのは、故堀河天皇には典侍仁子女王所生の嫡子内親王がおり、出自の疑わしい落胤を探し出し齋王に立てる必要はなかったことである。後に嫡子内親王は崇徳天皇の齋院に選出されていることから本人の資質に問題があったとも考え難い。それなのに鳥羽天皇の齋宮・齋院には、白河法皇の落胤が選ばれている。『中右記』などの古記録で選考の経緯を確認しても、白河法皇が強引に自身の皇女を齋王に立てることをこだわっていたように

も思えない。その上、摂政藤原忠実を筆頭に他の貴族たちもみな、齋宮・齋院になり得る候補者が存在しないと認識しているのである。このように今上に姉妹が存在しながら、齋宮や齋院に選ばれない事例は、他にも確認できる。

永万元（一一六五）年六月二五日、病に倒れた父二条天皇の譲位を受けて生後七ヶ月で六条天皇は即位した。その後、同年七月二八日に二条上皇が崩御したため、諒闇明けの翌年一二月八日に叔母の休子内親王を齋宮に選出した。一方、齋院は交替が行われず、式子内親王が務めることになった。六条天皇には異母姉に僖子内親王がいるが、結局この時の齋宮に選ばれなかった。僖子内親王は高倉朝で齋院に選出されていることから、本人の資質に問題があるとは考え難い。

ここで双方の共通点を探ると、即位時及び即位直後に父帝が崩御していることである。しかし卜定時にはいずれも諒闇は明けており、本来ならば姉妹を齋宮・齋院に選出することに問題はない。現に前代の後冷泉朝では、父後朱雀上皇の諒闇が明けると、異母妹の禊子内親王を齋院に選出している。だが院政期になると、父帝の死から一年でその皇女を齋宮・齋院に選出する事例はみられなくなる。院政期以降に、父帝を失った皇女を数年間、齋宮・齋院に選出することを忌避する傾向が生じたようである。

時代は少し下るが『玉葉』安元二（一一七六）年九月一七日条に次のような記事がみえる。

此事一旦雖可_レ然。頗不_レ叶_二我朝之儀_一。敷。造_二服忌令_一之旨。不_レ載_下父坐之時可_レ減_二母喪_一之旨_上。只_二親共縮_二三年_一。定_二一替_一了。加之。冷泉院東宮之時。母后安子崩御。于_レ時。父村上帝御宇也。然而即被_レ用_二一年服_一了。今天子逢_二国母之喪_一。謂_二父之法皇御坐_一。何縮_二其喪_一。本條所_レ見准遽之例如_レ斯。不_レ知_二物議之輩。申_二出如_レ此之謬事_一。愚事云々。

これは同年七月八日に高倉天皇の母建春門院が死去した折、天皇の服喪期間に関して議論が起った時のことである。この時九条兼実は「服忌令には父存命中の母の喪について載せるところはないが、中国では二親の喪は三年間とする所を我朝では一年間に縮めてとしている。冷泉院が東宮であった時、父村上天皇の存命中に母后藤原安子が崩御したが、一年間の喪が用いられている。それなのに、何故今天皇が国母の喪に逢ったというのに、その喪を縮めなければならぬのか。」と応じている。このように院政期の貴族たちは中国では父母の死に対する服喪期間が三年間であるが、日本ではそれを短縮させて一年間の服喪にしていることを認識していた。摂関期から院政期にかけて、我が身に降りかかる神の祟を恐れ『延喜式』の穢規定を誇大解

釈する傾向があったとされている^③。そして従来以上の「忌」が要請され、信仰の観点から疑わしい穢を慎むという個人レベルでの判断が導入されたらしい。つまり斎宮・斎院候補の選定にあたり、父母の死から日の浅い内親王の選考を控える父傾向があったと考えられるのである。二条天皇の皇女僖子内親王は、父の死から三年後の嘉応元（一一六九）年一〇月二〇日に斎院に卜定されている。斎宮や斎院は神に奉仕する役割を担っているため、一定期間が過ぎるまで父母を亡くした皇女を斎宮や斎院に選出しなかった可能性が高い。鳥羽朝では堀河天皇の皇女を斎王に選出することを忌避していたため、現存の女子皇親の中から斎王候補を選出することが出来なかった。摂関期までであれば、二世女王（親王の娘）を斎王に選出すれば問題が解決できた。しかしこの時期には二世女王の存在は皆無であった。それ故に、白河法皇の落胤を探し出し、候補者不足の危機的状況を打開したのである。

2 崇徳朝にみる斎王卜定の問題点

保安四（一一二三）年六月九日、崇徳天皇の斎宮に守子内親王が選出された。守子内親王は後三条天皇第三皇子輔仁親王の娘であるので、本来ならば「女王」と呼ばれるべき存在であるが、『中右記部類』の筆者である藤原宗忠は「斎

院政期に於ける斎王選考の問題（長塩）

宮群行記」の中で、「内親王」として記している。^⑤その理由は「帝王編年記」（卷二〇）に「斎王守子内親王（輔仁親王女）白河院御猶子。保安四年六月九日卜定」とあるとおり、守子内親王が白河法皇の猶子となったことから、内親王として扱われていたためである。守子内親王には同母兄に源有仁がおり、永久三（一一一五）年に一三歳で元服した際、白河法皇の猶子となり、初めは皇嗣と目されていた。^{③⑥}しかし鳥羽天皇に顕仁親王（崇徳天皇）が誕生したため、元永二（一一一九）年八月一日に源姓を賜り臣籍降下し、直ちに従三位権右中將に任ぜられたのである。この違例の昇進について、『中右記』同日条に以下のとおりみえる。

今夕三宮之子宮有仁。賜姓爲臣。（源朝）

敍位三位。任右近衛權中將。又清原清友任掃部小

屬云々。（賜姓之事被仰。下右中辨雅兼了。後作三官符。）

件御子賜姓爲臣之條如何。圓融院御子末孫爲臣

下也。冷泉院・花山院・三條院御子孫之方。賜姓

之輩一兩人雖有其例。圓融院御後殊所不見也。

就中後三條院後胤中賜姓爲臣初出來。豈以可然

哉。往昔雖有其例。近代未見此事。但天運令

然。又何爲哉。

土御門右府師房。（寛仁四年正月敍。從四位下。二世王。其後賜源朝臣姓。十一月任侍從。）

侍從宰相基平。（長元二年十二月八日從四位上。元服日。一世源氏。）

近代件二人外所不見也。彼人々敍三四位。今度敍三位。依父親王之哀憐一敷。（輔仁親王）

臣籍降下の近代の例は、具平親王（村上天皇皇子）の子源師房と敦明親王（三条天皇皇子）の子源基平の二例しか存在しないこと。これらの人々は無位から四位に叙されたが、有仁の場合はいきなり三位に叙され、極めて異例なことであったことが確認出来る。そして今回の叙位について、宗忠は「父輔仁親王之哀憐によるか」と述べている。つまり輔仁親王に対する配慮から、白河法皇は有仁を破格に優遇したのである。

こうして有仁は白河法皇の意向により累進を重ねたが、同母妹守子内親王も同様に厚遇された。斎宮卜定の翌年四月二三日、守子内親王の初斎院の禊が行われ、白河法皇と鳥羽上皇の両院は三条御所の門前に車を留めて見物をしていいる。^{③⑦}守子内親王は糸毛車に御車副一四人を従えて御禊に臨み、その様子を多くの人々が見物していたようである。このように守子内親王は白河法皇の養女として人々から注目されており、その斎宮儀礼も非常に華やかなものであった。白河法皇が姪の守子内親王を養女に迎えたのは、有仁と同様に輔仁親王に対する配慮からと推測される。また守子内親王は父の輔仁親王を九歳の時に亡くしており、義父の白河法皇が守子内親王を養育していた可能性が高い。そ

れ故、白河法皇は孫の鳥羽上皇と共に守子内親王の御禊をわざわざ見物したのである。守子内親王は白河法皇の養女として厚遇されていたといえる。この守子内親王の斎宮選出は、養父白河法皇の意向を反映したものであったと思われる。

一方、斎院は斎宮卜定から二ヶ月遅れの保安四年八月二八日に禧子内親王が選定された。禧子内親王は堀河天皇の第一皇女で鳥羽上皇の異母姉にあたり、二五歳と高齢の斎院であった。ところで崇徳天皇は五歳の幼帝であるので娘はいるはずもないが、同母妹に禧子内親王がいた。しかし禧子内親王がこの時の卜定に於いて斎宮・斎院に選ばれることはなかった。禧子内親王が誕生した年の保安三年一〇月九日、母の中宮藤原璋子は阿闍梨寛信に十一面法を修させて、娘の平安を祈念させている。⁽⁸⁾ 禧子内親王は生まれた時からあまり身体が丈夫でなかったため、斎宮・斎院の候補から漏れたのであろう。他に候補者が存在するため、病弱な禧子内親王を敢えて選ぶ必要性はなかったのである。

但し結果としては、禧子内親王は大治元（一一二六）年七月二五日に母の典侍源仁子の喪により斎院を退いている。同二年四月六日に、同母妹の統子内親王が後任の斎院に卜定された。⁽⁹⁾ 統子内親王は大治元年七月二三日に誕生し

たばかりの鳥羽上皇の第二皇女である。最年少の斎王は、二歳で斎院となった醍醐朝の恭子内親王で、一歳の卜定例は皆無であった。⁽¹⁰⁾ 前斎院禧子内親王の退下から八ヶ月後に斎院卜定を行ったのは、統子内親王が数え年二歳になるのを待っていたためであろう。第一皇女禧子内親王はこの時六歳で、満一歳にも満たない統子内親王より斎院に年齢的には相応しいが、身体が弱いためこの時も斎院に選ばれることはなかった。

ところが統子内親王も長承元（一一三二）年六月二九日に疾病を理由に斎院を退下してしまう。そのため同年一月二五日、遂に禧子内親王が斎院に卜定されることになった。しかし生来病弱の禧子内親王が斎院の任を努めることは難しいものであった。『長秋記』同二年八月二八日条に、事畢退出間。自^レ女院^一有^レ召。仍着^二布衣^一參。召^二簾前^一被^レ仰云。齋院日來不例御坐。是年來宿^病瘵也。其上自^二去比^一發病未^二平癒給^二之間。件本御病更發。御腹ふくれ。御両足手なども腫て。凡飲食不^レ通御坐云々。依^レ是内々令^レ卜處。陰陽師廣方。御病極重云々。令過九月御事尤可^レ難云々。

とあり、禧子内親王の疾病を確認することができる。源師時は待賢門院（藤原璋子）からの呼出により、女院の許に参上すると、女院の娘で斎院禧子内親王の病状が芳しく

ないことが伝えられる。禧子内親王の状態は腹が膨れ、両手足も腫れており飲食も喉を通らない重篤な状態であった。そして禧子内親王の病状はその後も改善することなく、同年九月二日に病の悪化のため齋院を退下したのである。^① 齋院卜定からわずか八ヶ月での退下であった。その一ヶ月後の一〇月一〇日、禧子内親王は疾病により一二歳の短い生涯を終える。^②

同年一二月二一日、禧子内親王の後任齋院に怡子内親王が選出された。怡子内親王は輔仁親王の第二王女で、齋宮守子内親王の異母妹にあたる。怡子内親王も姉同様に白河法皇の猶子とされているが、白河法皇は大治四（一二一九）年に既に崩御している。異母姉の守子内親王と異なり、怡子内親王は生没年すら定かではない。姉妹とはいえ、有力な後見を持たない怡子内親王と、左大臣源有仁の同母妹守子内親王とでは待遇に明確な差があったと思われる。怡子内親王はおそらく度重なる齋院の交替により候補者が不足したため、急遽担ぎ出された齋院であったのだろう。

いずれにしろ崇徳朝において、輔仁親王の王女たちの存在は大きかったといえよう。齋宮・齋院を「治天の君」の直系の子孫の中からしか選べない状況は、候補者不在の事態を招き兼ねない、非常に不安定なことであった。このように院政期の齋王制は、非常に脆弱な状態の基に成り立つ

ていたのである。そして高倉朝において、齋宮及び齋院不在問題がいに現実化する。

高倉天皇の齋院は異母姉式子内親王が前代より継続して務めた。ところが嘉応元（一一六九）年七月二五日、式子内親王が疾病に伴い退下した後、短期間で齋院が次々と交替する事態に陥る。同年一〇月二〇日に二条天皇第一皇女僖子内親王を後任齋院に卜定、しかし病のため僅か一年で齋院を退下し、七日後に一三歳で夭折してしまう。ついで承安元（一一七一）年六月二八日、鳥羽天皇第七皇女頌子内親王を齋院に選出したが、またはや病により在任二ヶ月で齋院を退くことになった。ここでついに候補者一人も存在しないという異常な状況となり、高倉天皇に皇女が誕生するまで齋院を選ぶことができなくなってしまった。治承二（一一七八）年六月二七日、二歳の高倉天皇第二皇女範子内親王が齋院に卜定されたが、前任頌子内親王の退下より七年後のことであった。

一方、齋宮でも承安二（一一七二）年五月三日、惇子内親王が齋宮寮で薨去すると、候補者が存在しない状況に陥る。^③ そこで朝廷は公卿勅使を伊勢神宮に派遣し、宣命にて今は候補者が存在しないため、替わりの齋宮を卜定することができない旨を奉告している。齋宮も高倉天皇の皇女の誕生が待たれたのである。そして安元元（一一七六）年三

月三〇日、高倉天皇に待望の第一皇女功子内親王が誕生すると、翌治承元年一〇月二八日に二歳の功子内親王を齋宮に卜定している。暲子内親王の死から五年経ての選出であった。

前述のとおり、この時後白河法皇には二人の孫女王がいた。斎王に選ばれた女王は全員親王の王女であるが、この孫女王の父以仁王は親王宣旨を受けておらず、天皇の皇子でありながら「王」の身分に据え置かれていた。以仁王は暲子内親王（八条院）の猶子となり、暲子内親王の手厚い庇護の下で暮らしていた。暲子内親王は鳥羽上皇と藤原得子（美福門院）の皇女で、後白河法皇の異母妹にあたる。暲子内親王は父母から全国二百数十ヶ所に及ぶ膨大な莊園を伝領され、強力な権威と財力を備えていた。暲子内親王が以仁王を猶子としたのは、以仁王を美福門院が後見した故二条天皇の後の、鳥羽皇統を継ぐべき皇位継承者と位置づけていたためとされる。^⑤『平家物語』によると、以仁王は皇位継承において有力であったが、平清盛の義妹で憲仁親王（高倉天皇）の生母である平滋子（建春門院）の妨害に遭って阻止されたという。平氏は滋子の生んだ憲仁親王の擁立を目指しており、以仁王の存在は邪魔でしかなかった。^⑥院政期において、親王宣旨を受ける皇親男子は、皇位継承者とその同母兄弟、または出家した皇子のみである。

つまり以仁王に親王宣旨を下すことは、高倉天皇の有力な対抗馬に皇位継承の正当性を与えることを意味する。それ故に、以仁王に対する親王宣下を拒んだのであろう。結局、政治的思惑を優先させた結果、斎院の不在を招いてしまった。このことから承安元年の時点において、長期間の不在が問題にならないほど斎院の権威が低下していたことが窺える。斎院は天皇との対応関係が早くに崩れ、おもな役割が華やかな賀茂祭における斎院御禊であり、世俗化の傾向が進んでいた。そのため存在意義が喪失し、何年も斎院を置かないことに対して切迫感がなかったのであろう。

おわりに

白河天皇は皇位継承者を一人に限定し、その他の皇子たちはみな出家させるという特殊な皇位継承計画を行った。

その結果、親王の数が激減し、その娘である二世女王が殆ど存在しない状況になった。平安期以降、女王斎王は前提条件として親王の娘である必要があった。この二世女王の減少は斎王候補の範囲を狭める結果を招く。摂関期に頻発した女王斎王は姿を消し、代わりに治天の君の子や孫が多く選出されるようになった。しかし制度を安定的に維持するためには、候補者の範囲は広い方が良い。斎王が治天

院政期に於ける斎王選考の問題（長塩）

の君の直系の子孫に限定されると、何らかのトラブルが起きた場合、斎王候補が一人も存在しないという事態を招きかねないからである。

その問題は早くも鳥羽朝で確認することが出来た。白河法皇の皇子は堀河天皇以外全員出家させられたため、鳥羽天皇の斎宮・斎院は白河法皇或いは堀河天皇の皇女に限定されていた。しかしこの時には堀河天皇の皇女は候補に挙げられなかった。これは摂関期から院政期にかけて、『延喜式』の機規定を誇大解釈する傾向があったことが原因である。すなわち父が死去して間もない皇女は、ある一定期間が過ぎるまで斎宮・斎院に選出しなかった可能性が考えられるからである。そのため、鳥羽天皇の斎宮と斎院は実質白河法皇の皇女から選ぶ必要があった。しかし白河法皇の正妃所生の皇女たちは全員すでに斎宮・斎院に選出されており、選ぶことが出来ない。そこで白河法皇の落胤から斎宮と斎院を選考することになった。以後、院政期は慢性的に候補者不足の状態であったといえる。斎宮・斎院を「治天の君」の直系の子孫の中からしか選べない状況は、斎王制の脆弱な一側面を示す現象でもあった。

註

- (1) 『江家次第』 第卷一二、神事、「齋王群行」。
- (2) 榎村寛之「即位・大嘗祭と齋王卜定の関係について」(『律令天皇制祭祀の研究』、塙書房、一九九六年)。
- (3) 堀口悟「齋院交替制と平安後期文芸作品」(『古代文化』 第三一巻第一〇号、一九七九年)。
- (4) 八世紀の女王齋宮
* 智努(元明朝) / * 円方(元明朝) / 久勢(元正朝) / 縣(聖武朝) / 小宅 / (孝謙朝) / 淨庭(光仁朝)
智努女王と円方女王は『一代要記』にのみ齋宮としてみえ、『続日本紀』にはその名は記されていない。
- (5) 八世紀後半〜一一世紀後半にかけての女王齋宮。
隆子(円融朝) / 濟子(花山朝) / 恭子(一条朝) / 樽子(後一条朝) / 敬子(後冷泉朝) / 淳子(白河朝)
- (6) 榎村寛之「齋女王の時代」(『伊勢齋宮の歴史と文化』所収、塙書房、二〇〇九年)。
- (7) 直木孝次郎「天照大神と伊勢神宮の起源」(『日本古代の氏族と天皇』、塙書房、一九六四年。菟田俊彦「上代史上の伊勢齋王」(『國學院雜誌』第七二巻第九号、一九七一年。岡田精司「伊勢神宮の成立と古代王権」(『古代祭祀の史的研究』、塙書房、一九九二年)。小林茂文「齋王の原像と制度―古代王権と女性(一)―」(『周縁の古代史―王権と性・子ども・境界』所収、有精堂、一九九四年)。真弓常忠「齋王と采女」(『古代祭祀の構造と発達』、臨川書店、一九九七年)。榎村寛之「齋王制度の成立と展開」(『伊勢齋宮の歴史と文化』、塙書房、二〇〇九年)。
- (8) 田中卓「齋王制度の成立について」(『田中卓著集四
- 神宮の創始と発展』、国書刊行会、一九八五年)。門脇禎二「齋王女から齋王制度へ」(『古代文化』第四三巻第四号、一九九一年)。西宮秀紀「伊勢齋宮成立」(『伊勢湾と古代の東海 古代王権と交流』、名著出版、一九九六年)。
- (9) 「律令時代における齋宮寮官―伊勢国司との関係を中心として―」(『神道史研究』第一九巻第三号、一九七一年)。大川勝宏「光仁・桓武朝の齋宮―方格地割形成にみる齋宮の変革」(『古代文化』第四九巻第一号、古代覺協會、一九九七年)。井上有希「八・九世紀における齋宮寮の動向―移転から考察する存在意義―」(『続日本紀研究』第三三三三号、二〇〇一年)。
- (10) 橋本義彦「中宮の意義と沿革」(『平安貴族社会の研究』、吉川弘文館、一九九四年)。山田彩起子「天皇准母内親王に関する一考察」(思文閣出版、二〇一〇年)。栗山圭子「准母立后制にみる中世前期の王家」(『中世王家の成立と院政』、二〇一二年)。
- (11) 野村育代「中世における天皇家―女院領の伝領と養子」(『近代女性史研究会編「家族と女性の歴史 古代・中世」、吉川弘文館、一九八九年)。野村育代「女院論」(大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教3 信心と供養』、平凡社、一九八九年)。
- (12) 榎村寛之「齋王制と天皇制の関係について」(『律令天皇制祭祀の研究』、塙書房、一九九六年)。
- (13) 長塩智恵「齋王卜定に関する一考察 撰関期を中心に」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』第一三三号、二〇一四年)。
- (14) 栗山圭子、前掲論文、註(10)。

院政期に於ける齋王選考の問題（長塩）

(15) 平安期以降の女王齋宮

- 宣子女王（皇孫）——桓武天皇第一二皇子仲野親王王女。
- 元子女王（皇孫）——仁明天皇第五皇子本康親王王女。
- 徽子女王（皇孫）——醍醐天皇第四皇子重明親王王女。
- 悦子女王（皇孫）——醍醐天皇第四皇子重明親王王女。
- 隆子女王（皇孫）——醍醐天皇第一三皇子章明親王王女。
- 濟子女王（皇孫）——醍醐天皇第一三皇子章明親王王女。
- 恭子女王（皇孫）——村上天皇第四皇子為平親王王女。
- 傳子女王（皇孫）——村上天皇第七皇子具平親王王女。
- 敬子女王（皇孫）——三条天皇第三王女敦平親王王女。
- 淳子女王（皇曾孫）——小一条院敦明親王（三条天皇第一皇子）王子敦賢親王王女。

(16) 淳子女王の祖父敦明親王と白河天皇の祖母禎子内親王は異母兄妹。そのため淳子女王は白河天皇の再従姉妹にあたる。

(17) 榎村寛之、前載論文、註(12)。

(18) 『日本紀略』元慶四（八八〇）年一二月四日条。

(19) 齊子女王の母は下野守源政隆女（瑠璃女御。初め敦明親王妃藤原寛子（藤原道長女、母は源明子）の女房であつたが、寛子の死後に敦明親王から寵愛を受ける。

(20) 甲田利雄「齋宮覚書」（『平安時代臨時公事略解』所収、続群書類従刊行会、一九八一年）。榎村寛之、前掲論文、註(12)、富樫美恵子「選定と齋王忌避の思想」（『寧樂史苑』第四七号、二〇〇二年）。

(21) 白河天皇のオバにあたる後朱雀天皇の皇女は八人いる。皇后禎子内親王所生の第一皇女良子内親王と第二皇女娟子内親王は、長元九（一〇三六）年十一月二八日に齋宮齋院

に卜定。中宮藤原姫子所生の第三皇女祐子内親王と第四皇女祿子内親王のうち、祿子内親王は寛徳三（一〇四六）年三月二四日に齋院に卜定、祐子内親王は延久四（一〇七二）年一二月に出家。さらに女御藤原延子所生の第五皇女正子内親王は、天喜六（一〇五八）年六月二七日に齋院に卜定されている。また伯父にあたる後冷泉天皇は皇子女を一人も残さず崩御したため、従姉妹が一人も存在しなかった。このように白河天皇は齋王に選べるオバや従姉妹は存在しなかった。

(22) 『小右記』寛仁三（一〇一九）年三月五日条、

當時院男女男者左大臣女御女、高松為親王之宣旨下也。為故三院王子今被下下為親王之宣旨上云々。

故華山院御子二人為冷泉院王子為親王。依彼例所被行云々。已不相合之例也。所以者何。冷泉院御坐之時為彼王子。而三條院崩已及三箇年。今更為彼王子如何。一時議坎。就中高松腹去年産給。以崩後一生給女王入彼三條院王子為親王。天下必有言乎。

敦明親王の王子女は花山院の御子の例を先例に、故三條院の猶子となつて親王宣旨が下された。敦賢親王は長暦三（一〇三九）年の誕生であるので、この時に親王宣旨に受けていない。しかし『十三代要略』に、「敦賢親王小一条院男。母元平十二月式部卿。承保元年十一月廿一日三品。康平元年正月申務卿。同四年十二月式部卿。」と記されていることから、天喜元（一〇五三）年一二月に、他の兄弟姉妹と同様に三條院の猶子となり親王宣旨が下されたことが確認出来る。

(23) 『天祚禮祀職掌』

・後三條院 治暦四年七月廿一日即位。〔中略〕 太政官廳

左侍從。式部卿敦賢親王。從四位下源俊輔。少納言
代丹後守正五位下藤原敦基。

・白河院 延久四年十二月廿九日即位。〔中略〕 大極殿

左侍從。四品式部卿敦賢親王。從四位上源道良。少
納言從五位上藤原公經。

・堀河院 應德三年十二月十九日即位。〔中略〕 大極殿

・堀河院 應德三年十二月十九日即位。

〔中略〕

大極殿

女顯綱

・堀河院 應德三年十二月十九日即位。〔中略〕 大極殿

女顯綱

(24) 『水左記』承保四(一〇七七)年八月一七日条。

(25) 三条天皇第四皇子。母は皇后藤原城子(藤原濟時女)。同

母兄妹に敦明親王(小一条院)・敦儀親王・敦平親王・
当子内親王・禊子内親王らがいる。

(26) 横山和弘「白河院政期における法親王の創出」(『歴史評論』
第六五七号、二〇〇五年)。

(27) 横山和弘、前掲論文、註(26)。

(28) 聖恵法親王：郁芳門院女房春日殿(藤原師兼女)所生、
寛治八(一〇九四)年誕生。長治元(一一〇四)年九月

二四日出家。

行慶……………備中守源政長女所生、康和三(一一〇二)年
誕生。

円行……………白河法皇女房備前(陸奥守源有宗女)所生、
大治三(一一二八)年誕生。

静証……………源顕房女所生、生没年不詳。寛治四(一〇九〇)
年五月七日出家。

(29) 寛暁……………典侍藤原宗子(近江守藤原隆宗女)所生、
康和五(一一〇三)年誕生。永久三(一一一五)年一二月

八日出家。

最雲法親王：伊勢守藤原時経女所生、康和七(一一〇五)
年誕生。元永二(一一一九)年一〇月二一日出家。

(30) 河内祥輔「後三条・白河「院政」の一考察」(『日本中世
の朝廷・幕府体制』所収、吉川弘文館、二〇〇七年)。

(31) 横山和弘、前掲論文、註(26)。

(32) 東郷富規子「大齋院管見」(『園田学園女子大学論文集』四、
一九六九年)。富樫美恵子、前掲論文、註(20)。

(33) 小野宮流権中納言藤原経季の子。同母兄に長治二
(一一〇五)年の日吉社の訴により周防国に配流となった権

中納言藤原季仲がいる。また従兄妹に鳥羽天皇の外祖母藤
原睦子、白河天皇の典侍藤原経子(白河天皇第二皇子寛行

法親王の母)、白河院の院近臣権中納言藤原通俊らがいる。
後に季実の私邸土御門東洞院第(又は正親町東洞院第)は

白河法皇の院御所に利用されている。また季実は『中右記』
永久二(一一一四)年三月一六日条に「季実任「齋宮寮頭」。
是被_レ止保俊一也。」とあり、藤原保俊に替わつて嫡子内親

王の齋宮寮頭に任命されていることが確認出来る。

(34) 三橋正「日本古代神祇制度の形成と展開」(法藏館、
二〇一〇年)。

(35) 所京子「『中右記部類』齋宮守子の群行発遣記録」(『齋王
の歴史と文学』所収、国書刊行会、二〇〇〇年)。

(36) 源有仁は「本朝皇胤紹運録」に「為 二白河養子」、また『今
鏡』(みこたちの巻)にも、「御年十三になり給ひし時、初

冠せさせ給ひしかば、白河院の御子にし申せ給ひ」とみえ、
白河法皇の猶子となっていたことが窺える。

(37) 『永昌記』保安五(一一二九)年四月二三日条。

院政期に於ける齋王選考の問題（長塩）

待賢門女
院宮御時

- (39) 『中右記』 大治二（一一二七）年四月六日条。
- (40) 『玉葉』 治承二（一一七八）年三月一日条には、二歳例として恭子内親王（醍醐天皇第三皇女）・恂子〔統子〕内親王（鳥羽天皇第二皇女）・功子内親王（高倉天皇第一皇女）の三例、三歳例として尊子内親王（冷泉天皇第一皇女）・恭子女王（為平親王第三王女）・馨子内親王（後一条天皇第二皇女）・媿子内親王（白河天皇第一皇女）の四例が見える。二歳三歳の卜定は先例を尋ねるほど珍しい事例であった。
- (41) 『中右記』 長承二（一一三三）年九月二日条。
- 『長秋記』 同日条。
- (42) 『中右記』 長承二（一一三三）年一〇月一日条。
- (43) 『帝王編年記』 に、「齋院 怡子内親王。輔仁親王女。白河院御猶子。長承二年十二月廿一日卜定。」とあることから、守子内親王と同様、怡子内親王も白河法皇の猶子となり、内親王宣旨を受けていたことが窺える。
- (44) 『玉葉』 承安二（一一七九）年五月二八日条。
- (45) 五味文彦『平家物語、史と説話』（平凡社、二〇一一年、初版一九八七年）。
- (46) 生駒孝臣「源頼政と以仁王」撰津源氏一門の宿命」（『野口実編』『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第二巻 治承』）文治の内乱と鎌倉幕府の成立」、清文堂、二〇一四年）。
- (47) 瀧浪貞子『伊勢齋王制の創始』（後藤祥子編『王朝文学と齋宮・齋院』、竹林舎、二〇〇九年）。

（京都女子大学大学院特別研修者）